中学校における「話し合い」学習指導の研究
―大村はまの場合を中心に―

教科・領域教育専攻
言語系（国語）コース
斎　藤　美　智　代

指導教官　世　羅　博　昭

1．研究の目的

本研究の目的は、「話し合い」学習指導のあり方について、先達の理論や理論や実践を考察し、学習者一人ひとりに確かな「話し合う力」をつけるための学習指導の原理と方法を明らかにし、自らの今後の実践の指針を得ることにある。価値観が多様化し、情報があふれている現代社会において、他者と「通じ合い」ながら新しい人間関係を築き、「通じ合い」をとおして相手を受け止め、より高い視野からものごとをみることができる人間を育てることが求められている。ことばによるコミュニケーションを考えると、その基盤となるのは話しことばであり、その基本は対話である。ことばで自分の気持ちを伝え、ことばで相手の気持ちを理解できてはじめてコミュニケーションは成り立つ。伝えたいという心を育て、伝える喜びを感じることができる学習指導を展開していかなければならない。話し合える学力とともに、話し合える人間性をも育てることができる「話し合い」学習指導のあり方を明らかにするために、本研究を行った。

2．論文の構成

本論文は序章・結章のほか次の三章で構成する。

第一章　「話し合い」学習指導の基礎理論の研究
第二章　中学校における「話し合い」学習指導の実際　―大村はまの場合―
第三章　中学校における「話し合い」学習指導の構想

3．論文の内容

第一章では、「話し合い」学習指導の基礎理論の基礎理論の研究を行った。第一節では、生きて働いている行為として「ことば」をとらえ、人間形成を目ざした学習指導論を展開している西尾実の考えを取りあげた。西尾は、話しことばを生活の基盤として人と人とがことばで「通じ合うこと」の重要性を唱えている。「話し合い」を「通じ合い」としてのことばの働きの典型と考えて、西尾の求めた「話し合い」学習指導のあり方を明らかにした。第二節では、コミュニケーションをからだとことばとの関係からとらえた竹内敏晴の考えを取りあげ、ことばとコミュニケーションの意味をからだの面から考えた。第三節では、これまでの考察で得られた課題を「話し合い」学習指導のなかでどう具現化していけばよいかを考察し、自らが求める「話し合い」学習指導のあり方を明らかにした。

第二章では、中学校における「話し合い」学習指導として、数多くのすぐれた実践をおこなった大村はまを取りあげ、求めるべき「話し合い」学習指導を実際の授業のなかでどう実現し

ていけばよいかを、大村実践のなかから探った。第一節では、大村はまを取りあげる意義を述べた。第二節では、大村の「話し合い」学習指導についての考え方を明らかにし、大村の「話し合い」学習指導は段階的展開で進められ、「話し合う力」は学習者に実の場における言語活動を繰り返し経験させていくことにより、螺旋を描くように高められていくということを明らかにした。第三節では、「話し合い」学習指導の実際として、基礎訓練、教材単元を経験単元の向きにしながら進めていく学習指導、「話し合い」のしかたを教える学習指導、「話し合い」の方法を用いる学習指導をそれぞれ取りあげ考察した。その考察をもとに、大村の「話し合い」学習指導の特質を５点にまとめ、以下に２点を挙げた

１　「話し合い」学習指導は、聞く・話す力の系統的な発達を見通したうえで、段階的に展開されている。聞く・話す力は聴解力がすべての基本にすえられ、応答力、発表力、討議力、司会力へと、毎日の授業のなかで、また、活動の場面に応じて、計画的に指導が位置づけられ、生活的に何度も繰り返し経験させながら螺旋を描くように高められていく。

２　「話し合い」を注意や指図で中断させず、討議内容を豊かにしていく実際的な指導方法が行われている。学習者は実際の場での「よく話せた」経験により、「話し合い」のおもしろさや価値に気づき、生きた呼吸を体得していく。

第三章は、第一章、第二章から学んだことを生かして、中学校における「話し合い」学習指導を構想した。

第一節では、これまで私が実践した「話し合い」活動を中心とした単元を取りあげ、分析・考察を行い、今後の「話し合い」学習指導実践上の課題を次のようにまとめた。

学習者に本当の力をつけるためには、育てるべき学習者像を明確に持ち、それをどのような学習活動によって育てていくかという見通しにたって、段階を踏んで系統的に指導していかなくてはならない。

その課題をふまえ、中学校三年間における「話し合い」学習指導の目標を設定し、大村実践の考察から得られた〈基本学習〉→〈練習学習〉→〈応用学習〉という三段階の指導原理にそって年間計画を立て、単元「城西中学校を紹介しよう」を構想した。構想にあたっては、次の三点を大事にした。

１　学習者を知り、学習者一人ひとりにあった指導をすること。

２　人と人とが通じ合えることのすばらしさを実感させるような学習指導をすること。

３　単元における学習が、学習者の生活に生きるような言語活動を経験させること。

４．今後の課題

ことばによって人間関係をひらくことができる学習者を育てるためには、教師自身がすぐれた言語生活者でなくてはならない。今後の実践研究上の課題として、次の３点を挙げる。

１　自らのことば自覚に立ち、言語生活を高めていくこと。

２　国語科教育の目標に照らし、系統的な学習を進めていくためのカリキュラム開発に取り組むこと。

３　学習者一人ひとりを生かし、本当の力をつける学習指導のあり方を求め続け、実践すること。